

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子



10月号

MONTHLY MAGAZINE KOBEKKO OCTOBER 1961 NO. 8

Refine NIKKETEX



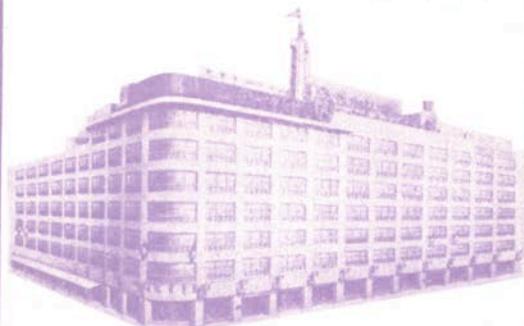
高級紳士服地

リファインニッケテックス



竹馬産業株式会社
元町通三丁目 ③ 5521~5

美しい
店で
楽しい
お買物



どこよりも良い品を どこよりも安く どこよりも親切に



神戸店

電話③8121

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたの暮らしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



神戸の女性



コンテッサ

秋風を切る
快適なドライブに



Hino コンテッサ 神戸日野自動車 TEL. ④5771-5



目 次

PHOTO／神戸女性・杉尾友士郎	1	24 PHOTO・詩／秋の装い
れんさい隨想④／秋風銀髪帖・阪本勝	4	26 ことしのパリモード・福富芳美
連載第7回「ここに神戸がある」		28 座談会／おとこのオシャレ
南京町・司馬遼太郎	8	33 AUTUMN FOR MEN,S WEAR
神戸っ子放談／直木太一郎	12	35 SHOPPING GUIDE
ずいそう／夏から秋へ・梁雅子	16	38 特集・うまいものシリーズ No. 8
映画戯評／ブラックタイツ・黒木ひかる	18	わが愛しの神戸のトマリ木
花時計・レリーフ／松井高男・伊藤誠	21	46 BONSIOR MADAME
1店紹介・永田良介商店	22	47 ずいそう／浅酌微醺・及川英雄

表紙／藤田嗣治・カット／中西勝・写真／杉尾友士郎・米田定蔵・デザイン／橋昭三

秋風銀髮帖

れんさい隨想 ④
阪 本 勝

やがて来た電車はかの女を吸い入れて去った。

ただそれだけのことだったが、狭い神戸なのに、その後ふたたびその婦人を見かけたことがない。

だがあのときの印象は妙に強くわたしの脳裏に刻みこまれて、わたし自身が作りあげた女性のイメージの一つになってしまっている。

中年または初老のインテリ女性の銀髮というものは、ほんとうにいいものだ。だが銀髮の冴えはかならず知性美とともにもある。

この条件が欠けると銀髮はむしろ白髪というべし、なぐもがなど思われる場合が多い。

そこで『神戸っ子』の読者とともに考えてみよう。

われわれの身辺で、社会的舞台にいる人で、知性豊かに、銀髮の美しい中年初老の女性をもとめるとしたら、いつたいどんなミセスまたはゴケス（後家）があるだろう。これからちよつと失礼な話になつて恐縮だが、まあ悪く思いたもうな。

かりに三人あげるとしたら、わたしはちゅうちよなくつきのミセスとゴケスをえらぶだろう。

アメリカ文化センターの星野富士子さん、県教育委員会の広岡貞子さん（以上ミセス）、社会党所属の神戸市会

いつの年の秋だったか、県庁近くの市電の停留所あたりを通りかかったとき、プラットで本を読みながら電車を待つて居る中年の婦人を見かけた。

横顔の氣品が高く、銀髮が秋風にゆらいで、きらきら光っていた。すくなくらす心をひかれたので、正面からお顔を拝ましていただこうと、わたしは物好きにも電車道の向側にわたり、しみじみとその姿に見入つた。

ゆるやかなウェーブの髪の幾すじかがくつきりと秀でた額にかかり、秋風のなるるにまかせていた。

眼鏡の奥に切れながの眼が見えた。女性の服装についてはきわめて鈍感なわたしにも、その婦人の和装がたのもとの短かいニュー・キモノの一種であることはわかつた。年格好は四十を出て五つ六つというところだったか。

議員、吉村とくさん（以上ゴケス）の三レディがそれで
ある。

星野さんと知りあつたのは、わたしが知事に就任して
からだから、約七年になるわけだ。この間星野さんの銀
髪はとみに光を加え、美しさを増したようだ。

それは浮世の苦労なんてケチなものではなく、知性の
深まりや思慮のこまかさなどを象徴するものだろう。

星野さんの英語は、じつにあざやかで、蔭できていれば
日本人と思わない人が多いだろう。

さる七月下旬、西ベルリンでもとのアメリカ文化セン
ター館長のバスクン博士夫妻から昼食に招かれたが、バ
スキン夫人は、世界中の女の友達のなかでホシノさんが
いちばん好きだとしきりにホシノ熱をあげていたのはう
なづけた。

広岡さんの場合は知性美の要素となつてはいるばかりで
なく、威厳の発光源ともなつてゐる。こんな話がある。
神戸高校の校長室に『温良貞淑』と書かれた額がかか
げられてあるのを見たYという高教組の幹部が『温良貞
淑なんていふ額を校長室にかけておくのはけしからん』
と広岡さんを責めたとき、広岡さんはいとも静かに『温
良貞淑がなぜいけないんですか』といった。すると相手
はそのまま黙つてしまつた。一座のものはすつかり感心
したそつだが、これこそ銀髪に象徴される女性の神秘な
威厳とでもいふべきものだらう。

吉村さんは酒を全然飲まないが、無理にすすめられて
コップの三分の一ぐらいいーブルをすすると、たちまち顔
が赤く染まる。「その瞬間が何ともカンともいえんほど
あだっぽい」というのが中井一夫さんの述懐だが、それ
はともかくとして、世上稀に見る端正な知性美が赤く映
える数カットは、白梅から紅梅に眼を転ずる瞬間に似て
あつと声を出したくなるくらい。

三女史とも眼鏡をかけてござる事をつけ加えておく。

神は女性に陣痛という苦を背負わしたものかわりに



男性には禿頭という恐怖を課したもうた。男性には陣痛の苦しみはないが、女性には禿頭の不安がない。神は平等である。

だから女性にとつてもつともたいせつで誇るべきものはふさふさとした髪であるはずだ。

しかも中年ごろからその黒髪が銀色に光り出し、ある種の女性においてはその知性美を引きたてるといふにいたっては、われら男性にとって羨望のかぎりである。

とりわけ蕭々たる秋風にゆるやかなしきがねの波がゆらぐ風情などは、女性の生涯を通じて最高の場面であろう。女性にとつて銀髪はかならずしも老いのしるしではない。それは尊い経験と良識が積みかさねられてゆく人生の道標なのだ。

悲しいかな、男性は頭髪あまりに短かく、ロマンス・グレイなんて威張つてみても、タカが知っているし、全白組は竹中郁君や社会党の江田君のように、パサパサでウェーブの風趣に欠けている。

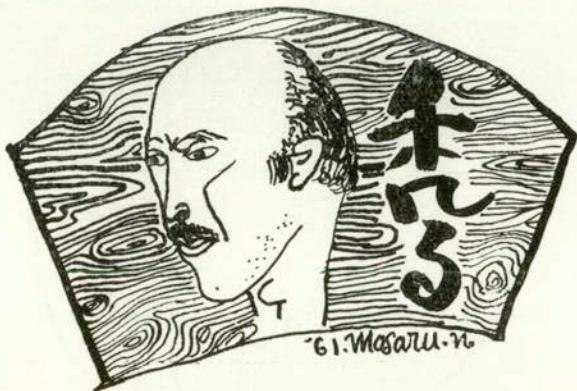
しかも多くの男性は、青年期を過ぎればつるつるの恐怖に直面しなければならない。

女性こそ陣痛を担保にしてしろがねの幸福をかち得たのだ。にくらしきこと言わんかたなし。

書き忘れてならんことが一つある。

欧洲から帰つて知つた松村小琴の死／

あの琴の糸がまだ切れていなかつたら、かの女のあのすばらしい銀髪をこの舞文の一節に登場せしめたのであるうものを。



FUGETSUDO

お慶びの日に

御引菓子
御土産菓子
御和菓子
洋菓子



御婚礼御菓子ご相談お待ち申上げております

創業 明治三十年



風月堂

神戸・元町三 TEL. 神戸 (3) 695・696



お慶び近いあなたに
気品をそえる真珠



北村パール

北村真珠株式會社

神戸／元町2・東京／スキヤ橋センター
TEL (3) 0072 (571) 8032



連載第7回
ここに神戸がある

司馬遼太郎／え 中西 勝

南京町

この夏、山中湖へ行つたもどり、横浜へ寄つて南京町で夕めしをたべた。これが南京町か、とおもうほどに豪華な町になつてゐた。中華料理の大きな町がすらりとならび、店の設計がとまどうほどにモダンだつた。

安くてもうまいというのが南京町の料理の特徴だから、家族の客が多く、室内装飾も日本化され、味もおもいきつて日本的になっている。つまり、「通」と絶縁した地点から、横浜南京町は異様な発達をとげた。なんといっても、こんにちは、大衆資本主義の時代なのだ。できるだけ多数の人から小銭をかきあつめる商売のやりかたが、成功したのだ。

しかし、神戸の南京町はちがう。

この町にはまだ、証券やデパートや電器メーカーのような「大衆資本主義」の波はまだやってきていない。

まだまだ「通」の町なのだ。

だから、ここの中食のうまさは、食通雑誌にはずいぶんほめられてゐる。どの店も、食通にほめられるだけでホクホクとよろこんでいる感じだ。そのかわり、横浜の南京町のように、京阪神の大衆を動員しようというような大それた望みはもつていないようおもわれた。

×

この日、例によつてまず五十嵐さんと会つた。

「きょうは南京町」

と五十嵐さんはいい、

「二人の権威者に案内していただくことになつています」

そのひとりが元町一丁目の「蛸の壺」の木村憲吾氏であり、ひと

りは兵庫新聞論説委員の竹田洋太郎氏だつた。

木村さんは先月お会いしたばかりだが、竹田君とは二十年ぶりのめぐりあいである。

大阪外語にいたころ、かれはスペイン語科おり、私は蒙古語科にいた。

私にとつて、大阪外語のころの思い出はちつとも楽しいものではなかつたが、それでも竹田君にあうことは、二十年前の自分に会う

ようなおどろきとうれしさがあつた。

「ぼくの顔おぼえてる?」

「おぼえてるとも」

と竹田君の顔をみてるうちに、不意に、その当時流行した歌のメロディがおもいだされた。たしか「ヤマノサビシイミズウミニ、ヒトリキタノモタノシイココロ」という歌詞で、あとはおぼえていないが、そのメロディが、湧くように耳の奥にきこえはじめたのである。

べつに竹田君の顔にメロディがくついていたわけではなく、私は竹田君の顔に自分の青春の顔をおもいだし、その顔の背景にそういうメロディが鳴っていたのだ。当時、町の映画館も喫茶店も、ひとつおぼえのようそのレコードをかけていた。

木村さんが、

「まず、中華料理の材料屋さんに行ってみましよう。ずいぶん妙なものがありますぜ」

なるほど、店に入つてみると、見ただけでは正体のわからない食品が、さまざまな容器につめられてならんでいる。

いちいちの食品の名はわすれたが、その一つ一つが、私のような気の弱い非食通からみれば、ささやかなスゴミを感じさせる個性をもつていた。

中国人のえらさは、この地上あるすべての非毒性の動植物をみごとな食品に仕立てあけるところにある。すでに漢の時代に鯉の料理法だけで百種類以上もあつたというから想像もつかない民族であるもしかれらが、宇宙船で月世界へゆくとしたら、最初に考えることは、月をテンブラーにすべきか、スープにすべきか、ということかもしれない。

そこへゆくと、日本人などはタカが知っている。

広東人は悪食だというが、日本の信州人や東北人も、それにおとらぬ悪食なのだ。

私は外語のころ、福島県出身の同級生がいて、福島の田舎では、ネコをころして軒端につるしておくと三日でうまくなるといった。私はおどろいて「福島県ではネコを食うのか」というと、先方はさらに眼をまるくして、

「大阪ではネコを食わねえのけ?」



といった。

信州へゆくと、宿屋でも、カイコのサナギをツクダニにして食膳に出す。ヘビも食う。

信州では、ヘビが道ばたに迷い出でると、いい娘さんが歎声をあげて追っかけるというから、りっぱな平常食なのだろう。

そのくせ、東北のネコ料理や信州のヘビ料理がうまいというはなしをきいたことがない。つまり、調理法が原始的で、とうてい他郷の者を魅了するだけのものをもつてはいないのである。

「とにかく、中国人はすごいですよ」

と、中國通の木村さんがいった。

そのあと、竹田君につれられて、南京町の露地から露地へとあるき、「河童天国」でギヨーザをたべた。なるほどうまい。

竹田君は、関西学院中学のころからの食道薬家で、このあたりのウロツキには二十年のキャリアがあるという。

「神戸は食通の町やな」

というと、

「うん。たしかに大阪よりはうまい。しかもやすい」

たしかに南京町は通の町だが、しかし京阪神の大衆の中で〇・一%も通はない。

その〇・一%程度をよろこばせている「商仙」のような連中が神戸の町にまだたくさんいるからいいものの、もしたれかがそのなかに当世流の「大衆資本主義」をもちこんだとき、神戸の南京町はたちまち横浜の南京町になってしまいだらう。

それがいいことかどうかは、私にはわからない。

（作家）

